

医研285


(別紙様式第3号)

論 文 要 旨

論 文 題 目

Stress buffering effects of social support on depressive symptoms in middle age :
Reciprocity and community mental health

(中年期の抑うつ感におけるソーシャルサポートのストレス緩衝効果について：
互酬性および地域精神保健をふまえて)

氏 名 瀧澤 透 

論 文 要 旨

【背景と目的】 ソーシャルサポートが健康に影響することは公衆衛生の分野で良く知られている。カプランは社会的紐帯の欠落はメンタルヘルスに大きな影響を与え、地域精神保健にサポートシステムの重要性を指摘した。ソーシャルサポートが果たす役割、特に症状（抑うつ感など）に対するストレス緩衝効果（ストレスが高い場合、ソーシャルサポートがある者はない者に比べて症状が少ないこと）はこれまで多くの研究がされてきた。しかし、ストレス緩衝効果の研究で、ストレス状況下における抑うつ感に対する中年層や互酬性を踏まえた研究はこれまでにない。この互酬性とはサポートの授受を指すが、サポートを受けた効果だけでなく、提供する効果についての検討が近年注目をされている。ソーシャルサポートが中年期において抑うつ感に関連があることを示せば、うつ病の予防はもとより、うつ病が遠因

とされる中年期の自殺の予防にも貢献し、心の健康づくりや地域精神保健に方向性を与える。本研究は大規模な地域住民の中年層を対象とした、抑うつ感に対するソーシャルサポートのストレス緩衝効果を性別・サポートの授受別に検討することを目的としている。

【対象と方法】 調査対象は青森県六戸町に住む40-69歳の全住民4558人（平成15年9月住民基本台帳）であり、調査デザインは横断研究、調査方法は自記式無記名の質問紙調査であった。調査期間は平成15年9月7～15日で質問紙を戸別に配布回収した。回収数は3182件（回収率69.8%）で、無効の50件を除く3132件を分析した。抑うつ尺度はCES-Dを、また、ソーシャルサポート尺度は崎原らのMOSS-Eを用いた。緩衝効果の解析は両尺度の回答に欠損のないものを有効とし、方法は抑うつ得点を従属変数としてストレッサー高低×各サポート高低を検討する2元配置分散分析を実施した。ソーシャルサポートの下位尺度は手段的サポ

ート（有効回答 1481 件）、情緒的サポート（同 1466 件）、提供サポート（同 1378 件）の 3 つであり、解析は下位尺度ごとに性別に検討した。倫理的配慮として本研究は個人を特定されない連結不可能匿名化されたデータを用いた。

【結果】 ストレス状況下におけるソーシャルサポートの抑うつ感に対する直接効果は男女とも情緒的サポートにのみ見られた。しかし、緩衝効果は男性にのみ、しかも全ての下位尺度で見られたが、女性には全く見られなかった。

【考察】 男性においては、手段的・情緒的サポートを受けている場合だけでなく、サポートを提供している場合においても高いストレス状況下では抑うつ感が低くなることが明らかにされた。性差は顕著であったが、これまでに女性の情緒的親密さの相違や社会経済的地位の低さの指摘がある。地域住民の心の健康づくりには、特に男性において互いに支え合うことの重要性が示唆された。

平成19年2月6日

(別紙様式第7号)

論文審査結果の要旨

報告番号	* 課程博 論文博	第 号	氏名	瀧澤 透
論文審査委員	審査日	平成 19年 2月 6日		
	主査教授	宮崎 哲次		印
	副査教授	吉井 興志		印
	副査教授	村山 菊之		印
(論文題目)				
Stress buffering effects of social support on depressive symptoms in middle age : Reciprocity and community mental health				
(論文審査結果の要旨)				
上記の論文に関して、研究に至る背景と目的、研究内容、研究成果の意義、学術的水準等につき慎重かつ公正に検討し、以下のような審査結果を得た。				
1. 研究の背景と目的				
ソーシャルサポートが健康に影響することはよく知られており、ストレス緩衝効果の研究も多い。しかしコミュニティーの中年層を対象とした研究は多くない。本研究の特徴は、近年の傾向である互酬性の検討を踏まえ、また、自殺死亡が多発している地域をフィールドとした悉皆調査を実施している点にある。本研究は、地域住民の中年層を対象とし、抑うつ感に対するソーシャルサポートのストレス緩衝効果を、互酬性を踏まえて性別・ソーシャルサポートの類型別に解析し詳細な検討を行っている。				
2. 研究内容				
青森県六戸町に住む40-69歳の全住民4558人を調査対象とし、戸別の配布・回収による質問紙調査を実施した。調査に用いたスケールは、抑うつ尺度はCES-D (Center for Epidemiologic Studies Depression scale)、また、ソーシャルサポート尺度は崎原らのMOSS-E (Measurement of Social Support-Elderly)であり、ストレスについては4件法で測定している。回収数は3182件(回収率69.8%)で、解析は両尺度に欠損のないものを用いている[手段的サポート(1481件)、情緒的サポート(1466件)、提供サポート(1378件)]。				

ストレス緩衝効果の解析方法は、CES-D 得点を従属変数とし、ストレッサー高低×各サポート高低の Two-way ANOVA であった。

その結果、主効果は男女とも情緒的サポートだけ見られた。一方で、交互作用は男性のみ各下位尺度で有意差がみられた〔手段的 $F(1,673) = 7.17$ $P = 0.008$ 、情緒的 $F(1,679) = 7.21$ $P = 0.007$ 、提供 $F(1,635) = 12.57$ $P < 0.001$ 〕。即ち、男性ではサポートを互酬的に受けたり提供したりする人間関係が、ストレス下で抑うつ的な症状を緩衝することが示された。

しかし本研究の限界はいくつかあり、ストレスの測定が質・量ともに不十分な点や、交絡因子の存在も否定できない点などが考えられた。

3. 研究成果の意義と学術的水準

本研究は、ソーシャルサポート研究において、大規模な地域住民中年層を対象にし、互酬性を踏まえて抑うつ感に対するストレス緩衝効果を性別に検討したものであり他に類はない。抑うつ感とソーシャルサポートの互酬性の関連という新たな領域を検討したことや、また、顕著な性差があったことを確認したことは、精神保健学の見地から高い学術的な意義があると判断される。さらに、うつ病や自殺予防などコミュニティーメンタルヘルスにおける予防施策に意義のある知見を提供している。

以上より、本論文は学位授与に十分に値するものであると判断した。

- 備考
- 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。
 - 2 要旨は800字～1200字以内にまとめること。
 - 3 *印は記入しないこと。